

# オリゲネスにおける 神のエネルゲイア

松 丸 太

一

有賀鐵太郎は、その著書『キリスト教思想における存在論の問題』<sup>(1)</sup>の中で、ユダヤ教およびキリスト教に固有の神観は、『旧約聖書』『出エジプト記』第三章一四節の「我は有るところの者なり」<sup>(2)</sup>のヘブライ語原文 *'ehyeh 'asher 'ehyeh* に典型的に表されていると言い、*'ehyeh* の不定形 *hayah* を取ってそれをハヤトロギアと名付けた。有賀によれば、ユダヤ・キリスト教の神は、万物を有らしめる創造的な絶対的主体であると同時に、言葉 (*qabrah*)<sup>(3)</sup> として人間に語りかけ「我と汝」の人格的な関係を結ぶ神、ダーバール (*qabrah*) を通して歴史に介入し歴史を導く神、武藤一雄博士の言葉を用いれば、「動的人格的存在不斷に自己を啓示する存在であり」「意志的人格の主体として」被造の世界に積極的に関与し、「歴史に内在的でありながら、同時に歴史に対して超越的な神」ということになる<sup>(4)</sup>。勿論、そうした力動的な神観は新約聖書にも見出される。例えば『ヨハネ

伝第五章一七節の「わたしの父は、いままなお働いておられる。だからわたしも働くのだ。」では、被造的世界に不断に介入する神の働きが宣言されており、また『ピリピ書』第二章一三節の「あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行なわせておられるのは神だからです。」という文章のギリシア語原文を照参することによって、ユダヤ・キリスト教の神が、能動的に「働く方」(*o eleyto*)<sup>(5)</sup>であることが読み取れるのである<sup>(6)</sup>。

他方、ユダヤ・キリスト教に固有な神観は、「働き」という概念に加えて、「力」という概念によっても特徴付けられることができる。それはヘブライ語では「ハイル」(*hayil*)<sup>(7)</sup>、「ゲブラー」(*geburah*)等の語で、ギリシア語では「デユナミス」(*dunamis*)<sup>(8)</sup>「イスキヌ」(*ischnos*)<sup>(9)</sup>「クラトス」(*kratos*)等の語で表示されている。なお、グルントマンの調査結果から判断して、「力」を表示するヘブライ語とギリシア語との間には、厳密に一義的な対応関係は見られないことから、以下ではギリシア語の「デユナミス」ないしは日本語の「力」にそのあらゆる類縁の意味を含ませてこれを使用することにする<sup>(10)</sup>。

いま、神とその「力」に言及する「聖書」の諸表現に基づいてユダヤ・キリスト教の神を特徴付けてみると、ユダヤ・キリスト教の神は、その力によって世界を創造し (*Gen. 1, 1*)<sup>(11)</sup>、人々を導き (*Exod. 32, 11*)<sup>(12)</sup>、自らを顕し (*II Mac. 3, 30*)<sup>(13)</sup>、人を癒し (*Luce. 5, 17*)<sup>(14)</sup>、神の国を実現する (*Apoc. 11, 17*)<sup>(15)</sup> 神の国を

なるだろう。つまりユダヤ・キリスト教の神は、その力によって被造物に力動的に関わる方でもある。しかも『マタイ伝』一四・二の「彼（復活した洗礼者ヨハネ）の内に諸力が働いている。」という言葉や『エフェソ書』三・七の「神がその力の働きによって私に与えられた神の恵みの賜物に即して、私はその（福音の）奉仕者となりました。」という言葉、同じく同書三・二〇の「私たちの内に働く力によって、私たちが求めたり、思ったりすることすべてを、はるかに超えてかなえることがおできになる方に。」という言葉などから、神が働きの究極的主体であると同時に、力それ自身が働きの主体としても表現されていることがわかる。神の力は、働く力として、活動なき純粹な「能力」や「可能態」とは異なり、その働きと密接に結び合わされて捉えられているのである。神の力と神の働きの差異については、なお概念的な吟味の余地が残されているだろうが、少なくとも神の力は、働く力であるというただその限りで、神の働きと同一であると言うことができるだろう。そして『第二マカバイ記』第三章によれば、神の力と働きとはともに、神の顕現をもたらしものと記されていることから、両者は勝義の神性を宿すものとして捉えられているのである。

ところで、旧約聖書外典あるいは第二正典が形成されるいわゆるヘレニズム時代には、例えば紀元前二、一世紀のストアの哲学者ポセイドニオスの唱える、生命力（*Quaest. Convict.*）

オリゲネスにおける神のエネルギー

vitalis) を世界原理とする一元論的世界観や、存在概念と作用概念とを同一視して、一者においては万物を生み出す力と働きとは同一であると説く三世紀のプロテイノスの哲学なども、やはり力動的な性格を表している。したがってここに力と働きとを媒介とするヘブライズムとヘレニズムとの間の思想的な相互交流の可能性を想定することができるだろう。例えばヘブライズムの方面ではポセイドニオスとの思想的な結び付きが指摘されている紀元前後一世紀のピロンは、神の諸力をプラトンのイデアと同一視して「この世全体は、不可視的な諸力によってまとめられ、維持されている。造り主はそれらの諸力を地の果てから天の極みまで張り巡らされた。」<sup>(13)</sup> と言っており、彼はストアおよびプラトン主義の概念を力において導入しているのである。勿論そうした力動性における類似は、ヘブライズムの世界観および神観とヘレニズムのそれらとをその力動性に関して外から見た場合にのみ言えるのであって、各々の思想の内実全般にわたって同じだと言うのではない。

ともあれ、私がここで取り上げるオリゲネスも以上のようなヘレニズムの諸思想とヘブライズムの諸思想とが交錯する文化的環境の中に生まれ育つたのであるから、またギリシア的教養を広く身に付けながらもなおキリスト者たらんとした彼の思想の中には、ヘレニズムの諸思想が垣間見られると同時に、ヘブライズムに特徴的な力動的な神観が見出だされるのでなければなら

らない。したがって当然、オリゲネスを取り扱った研究書には、オリゲネスの思想におけるヘレニズムとキリスト教との相互關係を論じたものは多い。しかしながらオリゲネスの思想の中で、ユダヤ・キリスト教の独自の考え方とされるいわゆるヘブライズムそのものを付随的に論じるものはあっても、それを主題的に取り上げたものはないように思われる。そこで以下では、オリゲネスとギリシア哲学との關係の考察は、それについての既存の研究書に譲ることとして、私としては、上で簡単にその特質を挙げたヘブライズムに眼差しを向けながら、テキストに即

しつつオリゲネスの神認識に関する考え方の内に神の「力」と「働き」の理解を探り、彼の神観を分析し特徴付け、それがまたヘブライズムの思想的系譜の中に正確に位置し得るものなのか否かを究明することにした。

## 二

オリゲネスは、『原理論』一・一・五で、神の本性とその認識不可能性について次のように述べている。

「したがって神について何かしら物体的なものを暗示する（聖書の言葉）の意味をすべて、私たちの才能の及ぶかぎり退けたのであるから、私たちは神がまことに把握し難く計り難い方であると主張する。神について私たちは何がしかを認識し理解することができるとしても、神は、私たちが認識する以上には

るかに優れた方であると信じられなければならない。…中略…いかに人間の精神が純粹で澄んだ精神であろうとも、人間の精神の眼差しでは、神の本性は、捉えられもせず見られもしないのである。」と。

オリゲネスは、いま取り上げている『原理論』の中で、あるいはその他の著作で、しばしば神の非物体性、非空間性、非時間性、総じて世界超越性を主張している。ところがいまの引用からわかるようにオリゲネスは、神がその本性においては人間の認識を超越していながらもなお、神について「何がしか」を人間は識ることができると述べており、神が絶対的な意味で認識不可能であるとは言い切らない。実際、いま引用した直後の箇所ではオリゲネスは、「私たちの目は時として、太陽の实体である光の本性を見ることはできないが、その光の輝きやその光線を見る」と述べて次のように言っている。

「同様に神の摂理の諸々の働きとこの宇宙万物の巧みさは、神ご自身の実体と本性とに比べれば、神の本性の光線のようなものである。したがって私たちの精神は、それ自体では神ご自身をあるがままに見ることができないのであるから、（神の）諸々の働きの美しさ、諸々の被造物の麗しさから私たちは宇宙万物の生みの親を認識するのである。」

このようにオリゲネスは、神の本性は認識され得ないとしても、あたかも本性から発する輝きのような神の諸々の働きから、

神は認識されると考えている。その際は、神の「何がしか」の認識の可能性の根拠を、被造物の麗しさを含めて一般に神の働きに求めていることがわかる。しかしながら神の「何がしか」の認識が、神の働きによって可能であるとすれば、神の働きによって識られるものは先ず、他ならぬ神ご自身であるとオリゲネスによって考えられているのでなければならぬだろう。というのは予め神ご自身が何らかの形で識られていなければ、その神の働きに「神の」という限定を付けることができないからである。では先ずその神の「働き」とは何か、そしてその神の「何がしか」とは何かをオリゲネスの思想の中に探ってみることにしよう。

オリゲネスは、『原理論』一・四・三で、神の働きと力について次のように述べている。

「さて、この幸いな力、*aparchē dυνamis* すなわち万物を支配する力を私たちは三位（の神）と呼んでいる。この三位は、善い神であり、万物の慈悲深い父であり、同時に *εὐεργετικὴ δυνamis* *to agnōnōntēn* すなわち善い働きをなし創造し摂理する力でもある。それらの神の力が一瞬たりともかつて無為であったと考えるのは条理を逸したことであり、同時に不敬なことである。というのは、何よりもそれらの力によって、神は相応しく認識されるが、それらの力があるとき神に相応しい諸々の働きを休んでいたり不動であったといささかなりとも憶測することは許さ

れないからである。実際、神の内にあり、いやむしろ神そのものであるそれらの力が、外部から妨げられると考えてはならない。更にそれらの力を妨げるものが何も無いのに、自らに相応しいことを取り行ない働くのをいとおしく思ったり、怠けたりしたりしたと考えてはならないのである。」<sup>(23)</sup>

このように神の力は、活動なき単なる可能態ではなくして、万物を支配する力、善い働きをなし創造し摂理する力、その善性に従って永遠に働く力、またそれらによって神ご自身が相応しく認識されるところの力である。そればかりかそれらの複数の力が神そのものであるとオリゲネスによって言明されていることに注目すべきだろう。オリゲネスによれば、神の力は、被造物を創造し摂理し支配するという救いの営み (*salvificus*)<sup>(24)</sup> の内で、まさにエネルギーとして働く一方、それ自身がまた神とされているのである。したがって私たちは、神の様々な力の働きにおいて、まさに働く力すなわちエネルギーとして働く神に直に出会うことができるわけである。しかもその本性において、認識不可能な神が、複数の力として自らを顕し、ために相応しく認識されたと考えられていることは、オリゲネスの神が「一即多の二律背反的な神であることを示していると言える。しかしその本性において認識不可能な神が、その働く力においてこの地上に住まう人間によって識られるには、神が、その本性において世界を超越すると同時に、その働く力において世界

に内在するものでなければならぬだろう。

実際、オリゲネスは、神がその力において被造的の世界に内在することを表明している、例えば彼は、『原理論』二・一・三で『聖書』の関連する箇所を引用しながら、次のように言っているのである。

「事実、神がご自分の力によって宇宙を結び合わせ世界を維持しているのでなければ、どうして『私たちは、神の内に生き存在している』と言えようか。更に、神の力が天と地において宇宙万物を満たしているのであれば、どうして救い主ご自身が宣言しておられるように『天は神の御座であり、地は神の足台である。』と言えようか。それはまた『主は言われる、私は天と地とを満たしているではないか。』と言っているとおりでである。したがって万物の生みの親である神が、全世界をご自分の力で満たし維持していることは、私たちが提示した(聖書)の言葉からも何人も難なく承認することと思う。」

ここではオリゲネスの神が、その力において世界に内在して人間に語りかける人格神となっていることが読み取れる。また『ヨハネ伝注解』六・三九・二〇三では次のように言う。

「特に、日の昇る所から日の沈む所までこれほどたくさん星を自らに引き連れている、これほど雄大な天の絶えまない運動をよく観察することができる人々にとっては、全世界に内在する(ἐκταταγμένα)これほど強大でこれほど偉大な力が何であ

るかにについて探求することは価値あることでしよう。というのはその力が御父と御子とは異なると敢えて言うことは、たぶん敬虔なことではないでしようから。」<sup>(28)</sup>

この箇所ではオリゲネスが、全世界に内在して「雄大な天の絶えまない運動」を引き起こす強大で偉大な力を御父と御子、すなわち神ご自身であると思倣すように『ヨハネ伝注解』の読者を強く促していることがはっきりと読み取れるのである。

こうしてオリゲネスの神は、その様々に働く力においてまた働く力として世界に内在して働き、かつ人間に語りかける人格神であると断定することができる。ここで一先ず、これまで引用し考察してきた神についてのオリゲネスの考え方をまとめると、オリゲネスの神は、その本性において世界を超越し、人間には認識不可能であるが、その多様に働く力において世界に内在し、認識され得る神ということになる。これで私が先ほどオリゲネスにおいて提起した神の「何がしか」と神の「働き」とは何かという問いは、若干の問題点を除いて解かれたと言つてよい。<sup>(29)</sup>すなわち神の「働き」とは、世界に内在して多様に働く神の複数の力であり、神の「何がしか」とは、まさしくそれらの、神として働く力なのである。

### 三

これまでオリゲネスにおける神の働きと力について考え方

をテキストに即して明らかにしてきたが、それらの考え方を通して私たちに現われてくる彼の神観が、本論文の冒頭で述べたヘブライズムの力動的な神観に合致するものであることは容易に察することができよう。有賀鐵太郎は、やはり『キリスト教思想における存在論の問題』<sup>(80)</sup>の中で、『知恵の書』第七章二五―二六節の「知恵は神の力の息吹、全能者の栄光から発する純粋な輝きであるから、汚れたものは何一つその中に入り込まない。知恵は永遠の光の反映、神の働きを映す曇りのない鏡の善の姿である。」を注解して次のように述べている。

『ソロモンの知恵』はプラトンの・ストア的な概念や用語を多分に取り入れながらも根底においては依然ヘブライ的である。だからこそ、ここにも神の力とか神の働きが強調されている。そして、その場合、神とデユナミスまたはエネルギーとは区別することができないものである。」

有賀の引用した『知恵の書』の言葉は、オリゲネスがキリスト論を展開する上で好んで引用する言葉でもあるが、その有賀の説明は、オリゲネスの神観にもそのまま当てはまると言える。しかしながらオリゲネスの神観がヘブライズムの神観に合致するとしても、やはり後者にはない新しい契機が存在することをお私たちは見過ごすことはできない。有賀鐵太郎によれば、純粋なヘブライズムの神・ヤハウェは、ハーヤーそのものすなわち「主体・即・働き、働き・即・主体」<sup>(81)</sup>であって、そこには静

止的な契機はまったく含まれない。しかしオリゲネスは、神は不変不易な方だと考えており<sup>(82)</sup>、またある箇所ではその考えを、実体 (ousia) と本性 (nature) という言葉を用いて哲学的な次元で説明しているのである。例えば次のように言う。

「私たちの誰一人として、神が形に参与したり色に参与するとは言わない。また神の本性は、静止しており堅固であるから神は運動にも与らない。そして神は義人を(ご自分と)同じ状態に招いてこう言われる。『しかしあなたは、ここに私と共に立ちなさい。』と」<sup>(83)</sup>

「事実、神は実体において変わらぬお方でありながら、予知と救いの営みにおいて人間的な事柄にまでお下りになられる。いやむしろ私たちとしては神の書物そのものを引き合いに出したい。神の書物は、『しかしあなたは同じ方です。』と『私は変わったことがない。』という(聖書の)箇所<sup>(84)</sup>で神が変わらぬお方であると言っているのである。」

このようにオリゲネスの神は、その本性と実体においては、不変不易、直立不動の神として捉えられてもいるのである。したがって有賀鐵太郎の説明する純粋なヘブライズムに従うかぎり、私たちは、オリゲネスの神観が完全にヘブライズムの思想的系譜の内に位置していると言うことができない。オリゲネスの神観には、その力と働きにおける力動的な側面の背後に、すなわちウーシアの次元において静止的側面が確かに存在するの

である。

#### 四

以上、私たちは、オリゲネスにおける神認識の問題を考察しながら、彼の神の「力」と「働き」の理解を探りつつ、彼の神観を分析してきた。その結果オリゲネスにおいては、神の働きは働く神の力の働きであり、しかも神の働く力すなわち神のエネルギーは、神そのものとして捉えられていることが明らかとなった。また神の世界内在と世界超越に関して言えば、オリゲネスの神は、その本性においては世界を超越しながらも、その力あるいは働きにおいて、世界に内在して働き、人間に語りかける人格神として捉えられているのである。したがってオリゲネスの神観は、それが静止的な側面を含む点を除いては、力動的なヘブライズムの思想的脈絡の内に位置していると言うことができる。またその静止的な側面をも含めてオリゲネスの神観をその全体像において見るならば、彼の力動的な神観には、実体というギリシア的存在論の概念が導入されて、ハヤトロギアとギリシア的なオントロギアとが併存している点で、私たちはそれを有賀鐵太郎のいま一つの用語である「ハヤ・オントロギア」という言葉<sup>(35)</sup>によって表示することができるだろう。あるいはまたオリゲネスの神が超越的即内在的、力動的即静止的、一即多の神となっている点に留意すれば、彼の神観をいわゆる「ペン

エンティスムスすなわち万有在神論と名付けることもできるだろう。<sup>(36)</sup><sup>(37)</sup>

#### 註

- (1) 有賀鐵太郎『キリスト教思想における存在論の問題』(著作集四)創文社、一九八一年。
- (2) 有賀鐵太郎『教父哲学』『哲学の歴史』(田中美知太郎編)人文書院、一九七七年、一二六頁から引用。
- (3) 有賀鐵太郎『キリスト教思想における存在論の問題』、一八五頁。
- (4) 同書、三四頁、一八九～一九〇頁参照。
- (5) 水垣 渉「祈りの宗教・キリスト教と神学」『宗教学のすそめ』(上田閑照、柳川啓一編)筑摩書房、一九八八年、三八四頁以下参照。
- (6) 武藤一雄『神学と宗教哲学との間』創文社、一九六二年、三三三～三三四頁。
- (7) この *ἐνεργία* という言葉は、「ピロンおよびバラタスの神論のキーワードの一個となる」。Cf. J. Ménard, *La Gnose de Philon d'Alexandrie*, Paris, 1987, pp. 20-21, p. 126; J. Meyendorff, *Introduction à l'étude de Grégoire Palamas*, Paris, 1959, pp. 309-310.
- (8) W. Grundmann, *δύναμις, δύναμις, ... in: Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament*, vol. 2 ed. G. Kittel,

Stuttgart, 1935, pp. 286-288.

- (6) 当然「働き」「エネルギー」(ἐνέργεια)は「働く」の動詞に処置を取る。

- (10) Cf. Aristoteles, *Metaphysica*, A12, 1019 a 15sq.; B1. 1045 b 25sq. et passim (Oxford Classical Text ed. W. Jaeger, 1957). また「形」の「能態」と致をなすプリミティブの「働」に適合できないのは明らかである。プリミティブの「エネルギー」の概念は「形而上学」の巻第六章1084 b 18以下に於いて「エネルギー」の目的がそれ自身であることが内在于あるからには「対象に働きかける意味を持たない」。また『ニコマコス倫理学』K巻第八章 1178 b 7以下及び『形而上学』V巻第六章 1074 b 21以下に於いて「プリミティブ」の神についてと同様で「それは「自己」自身を観想するのみ」対象に働きかけることを知らない。対象に働きかける意味を持つのはプリミティブの場合には「キーネーシス」(κίνησις)である。その点に関しては「藤沢令夫「現実活動態」『イデアと世界』岩波書店、一九八〇年、二二一頁以下を参照せよ。
- (11) Cf. K. Reinhardt, Poseidonios, München, 1921, pp. 9-11; 242-245 et M. Pohlenz, *Die Stoa, Geschichte einer geistigen Bewegung*, Göttingen, vol. 1, 1947, p. 216.
- (12) Cf. Plotinus, *Enneades*, V, 3, 12; V, 3, 15; VI, 8, 16

オリゲネスにおける神のエネルギー

VI, 8, 16 etc. in : Plotini Opera, vol. 2 ed. P. Henry/H. R. Schwyzer, Oxford, 1977.

- (13) Cf. J. Dillon, *The Middle Platonists*, Duckworth, London, 1977, p. 182 : There is also the very real possibility, particularly in the latter case (=Philo), of a mixture of influences (from what is Greek and what is Jewish).

- (14) Philon, *De Specialibus Legibus*, I, 8, 47-48 (The Loeb Classical Library, Philo, vol. 7 ed. F. H. Colson, Cambridge (Mass.), 1958, pp. 124-127); cf. E. Bréhier, *Les Idées Philosophiques et Religieuses de Philon d'Alexandrie*, Paris, 1908, p. 97.

- (15) Philon, *De Migratione Abrahami*, 181 (*Les Œuvres de Philon d'Alexandrie*, vol. 14 ed. J. Cazeaux, Paris, 1965, p. 210).

- (16) 有賀鐵太郎「オリゲネス研究」(著作集二)創文社、一九八一年、八頁以下、二二五頁以下、三五七頁以下参照。

- (17) オリゲネスを扱った書物はどれも、彼の思想とギリシア哲学との関係を多かれ少なかれ論じている。そのうち特に次の二つの研究書は、依然として高い学問的水準を保っている重要なものである。ただし両書は併読すべきであると思われる。H. Koch, *Pronoia und Paideusis: Studien über Origenes*



und sein Verhältnis zum Platonismus, Berlin/Leipzig, 1932, repr. 1973 in New York; H. Crouzel, *Origène et la Philosophie*, Paris, 1962.

(8) 使用するキリスト教 Die Griechischen Christlichen Schriftsteller der ersten Jahrhunderte, Berlin/Leipzig, 1887 sqq. に収録されている。また研究方法に関しては、次の三者の提示する方法に従い、平行箇所があるものだけを引用し、努めてテキスト自身にオリゲネスの思想を語らせるようにした。W. Völker, Das Vollkommenheitsideal des Origenes, Tübingen, 1931, P. 13; H. Lubac, Histoire et Esprit; l'Intelligence de l'Écriture d'après Origène, Paris, 1950, p. 42; H. Crouzel, Théologie de l'Image de Dieu chez Origène, Paris, 1955, p. 12.

(19) なお、オリゲネスの諸著作の略語表記は、ダニエルのそれに従う。Cf. J. Daniélou, *Origén, eng. tr. by W. Mitchell*, London, 1955.

(20) 神の本性の認識不可能性については更に「De Princ., IV, 4.8; II, 6.1; Comm. Jo., XII, 24. 146 を参照せよ」。

(R) Cf. De Princ., I, 1. 6, I, 2. 6; Comm. Jo., I, 29. 204; VI, 38. 193; XIII, 22. 131-23. 137; De Or., XXIII, 3; 3; XXIV, 2; Ex. Mart., XLVII; Cels., IV, 14; VI, 61 etc.(Cf. A. Miura-Stange, Celsus und Origenes, Gießen, 1926.

pp. 59-60; H. Koch, op. cit., pp. 20-22; P. Nemeshegyi, La Paternité de Dieu chez Origène, Tournai (Belg.), 1960, pp. 36-37.

(22) De Princ., I, 1. 6; cf. *ibid.*, I, 3. 1; I, 1. 7; Comm. Jo. fragm., XIII; De Or., XXIV, 2; Cels., VI, 65 etc.

(23) 訳文中の傍点は筆者による。

(24) オリゲネスのオイコノミア(経綸)の概念は、東方キリスト教会(正教会)のそれに通底していると思われる。次の書物を参照せよ。V・ロースキイ『キリスト教東方の神秘思想』

(25) M アルルは、オリゲネスにとって神のエネルギーは  
 アリストテレスの「現実態」とは無縁であり、デモナシスと  
 等価である。直つて、<sup>28</sup> Cf. M. Harl, *Origène et la Fonc-*  
*tion Révélatrice du Verbe Incarné*, Paris, 1958, p. 107, n.  
 14: L' *èpèreia* divine d'Origène ne s'apparente pas à l'*è-*  
*ph'analèis* aristotélicienne (opposée à la puissance, *dy-*  
*namis*).... Elle est l'équivalent de la *dynameis*...

(26) なお本論では、神の自己啓示についての記述を割愛せざるをえない。オリゲネスは、神認識には常に神の自己啓示が先行すると考えている。例えば次の箇所を参照せよ。De Prince, I, 2.6; I, 3.4; IV, 4.8; Comm. Jo, I, 38. 273; XIII, 24. 146; XX, 7. 46; fragm. XIV; Cels., VI, 17; VI, 65;

- VII, 44; H. Crouzel, *Origène et la Connaissance Mystique*, Paris, 1960, p. 118. じだんてい神の働きの神は自身に言えざる働きゆえなり。 Cf. De Princ., III, 1, 20 in Philocalia.
- (25) Cf. Act. 17, 28; Is. 66, 1: Math. 5, 34; Jer. 23, 24; Comm. Jo., VI, 39, 202; De Or., X, 2: Cels., IV, 5; IV, 12; V, 12; Hom. Gen., XII, 2 etc.
- (26) Cf. De Princ., I, 4, 3; Comm. Jo., XXVIII, 6, 49.
- (27) 若干の問題点では、本論と直接関係するものについては次に示す。一、神がその力をあつて自己限定する動機。一、神の自己参入の問題。前者については次の箇所を参照せよ。 Comm. Jo., I, 20, 119; I, 31, 217; De Princ., IV, 4, 4; Cels., II, 63; IV, 16; IV, 18; VI, 77; Hom. Luc., III etc. 後者は、 Cels., I, 23; De Princ., I, 1, 6; IV, 4, 2; IV, 4, 4 etc. 下記の通り。 H. Crouzel, op. cit. を参照せよ。
- (28) 有賀鐵太郎『キリスト教思想とその存在論の問題』一四三頁。
- (29) 同書、一八九頁。
- (30) De Or., XXIV, 2; cf. Comm. Jo., VI, 38, 193.
- (31) Cels., VI, 64; Platon, *Phaedrus*, 247C; Deut. 5, 31.
- (32) Cels., IV, 14; Ps. 102, 28; Mal. 3, 6; cf. Cels. I, 21; VI,

オリゲネスにおける神のキリストゲイム

- 62; Hom. I Reg., I, 4.
- (33) 有賀鐵太郎「上掲書、一九二頁以下参照。
- (34) 山本誠作『キリスト教と西田哲学』行路社、一九八五年、九五頁以下。および西田幾多郎『場所的論理と宗教的世界観』（全集版一）岩波書店、一九九八年、三九九頁参照。
- (35) 勿論、「聖書的・キリスト教的真理を自己のため、また他人のため弁証すること」(有賀、上掲書、九頁)が本心であったキリスト者オリゲネスの思想の評価は、私の以上の分析的評価では及ばざるであらう。これに終わっているならなからう。タネヤナは、オリゲネスの終末論について述べ、ゆえに「そのために死すべしなり」 H. Crouzel, *Arché e Teolos*, Milano, 1981, p.46; Cette Doctrine origénienne correspond à plusieurs données trouvées chez les auteurs du II<sup>e</sup> siècle, mais elle les organise en un ensemble. Il serait vain de vouloir démêler de cette conception cohérente et grandiose, constamment sous-jacente aux oeuvres de l'Alexandrin, les sources hébraïques et néotestamentaires et les sources helléniques: les plus immédiates sont Paul et Philon. Mais tout a été repensé à la lumière d'une expérience spirituelle.